

『たゆたえども沈まず』

監督：遠藤隆

ナレーション：湯浅真由美

撮影：田中進

ドローン撮影：上屋敷大輝

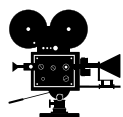
構成・編集：佐藤幸一、音楽：馬場葉子

2021年／日本／103分



DVD
販売サイト

DVD 発売中
発売元・販売元：マクザム
©2021 テレビ岩手



社会を旅する シネマ

きっと もっと 近くなる
きっと もっと 知りたくなる

防災サイレンが鳴る中、人々がゆっくり高台へと階段を登っていく。登りきったところにいる子どもたちは非日常の出来事に高揚した様子だ。「怪我とかしていない？」とカメラの手前側からの声に「大丈夫です！」と満面の笑顔で答える。だがすぐに状況が一変。眼下のすべてがうねる波に飲み込まれ、子どもたちは泣き出し、大人たちも呆然と立ち尽くす。カメラが次にとらえたのは高台のふもとにいる避難途中の人たち。地上からは津波が見えないようで慌てることなく歩いている。次の瞬間、映像がガタガタと乱れる。山の斜面をくだっているようだ。ブレブレの映像とは裏腹に鮮明に響く「早く！早く！もっと早く！！！」という叫び声。

本作は東日本大震災から10年間、地元のテレビ岩手が記録し続けた1850時間の映像から編み出された作品だ。被災者への配慮から一般的なメディアで津波の映像が使われることはほぼない。だが本作は、将来の防災資料にしてほしいと津波の実態も映し出す。しかも定点カメラなどの上からの視点ではなく、被災者の中にいた記者たちの目線からだ。

発災直後の映像だけではない。その後の10年間の地道な記録も、地元根差したメディアの力に満ちている。災害後のメディア取材は被災者への配慮に欠ける姿勢などが度々問題になるが、本作の記者たちは、カメラに映される人たちと同じく誰かを喪った被災者のひとりだからか、同じ地域に暮らす

地元メディアだからこそ 1850時間の記憶と想い

アーヤ藍

以前からの顔馴染みだからか、あるいは何度も足を運んでいるからか、距離感に安心感がある。

以前、本作の遠藤隆監督が話していた言葉も印象的だ。「相手のほうがよく知っている。私たちが伝えたいと思う方向に言葉を引き出そうとするのではなく、相手の話したいことに耳を傾け、なるべくそのまま伝える」。その姿勢でつくられたからだろう。本作に登場する人たちの声・姿は実に多様だ。

近所の人が皆、行方不明になってしまったため住み続けるのがつらい一方で、故郷だから離れたくもないという男性。夫の死亡届を6年以上出せず、日々夫への手紙を綴る女性。発災後に生まれた子どもたちのためにも仮設店舗で営業を続ける自転車屋。震災5日目に再び走り始めた三陸鉄道への感謝の気持ちから運転士になった青年。流れる涙もあればこぼれる笑顔もあり、ちょっとした表情や仕草、家の中の様子などから伝わってくるものもある。復興とともに変わる町並みなども含め、映像が言葉を越えて「語る」ものの多さに心がいっぱいになる。

本作の感想に「震災を知った気になっていたと気づかされた」「いかに『覚えていたフリ』をしていたかを突きつけられた」といった声を見かけた。私も同じ気持ちだ。2024年は悲しくも地震から始まった。被災された方々に心からのお見舞いの気持ちを寄せるとともに、多くの人の記憶と想いで織り成された本作が、未来の被害を減らす力となることを願う。



アーヤあい：映画探検家。1990年生。慶應義塾大学卒。在学中に訪れたシリアが帰国直後に内戦状態になったことをきっかけに、社会問題をテーマにした映画の配給宣伝を行うユニテッドピープル(株)に入社。同社取締役副社長も務める。2018年独立、映画イベントの企画運営や記事執筆等を行う。

